答えはひとつじゃない。だからみんなで考えましょう！

ミレニアム育児そーだんしつ

育児雑誌をよく読むけれど、どれも決まりきった答えばかり。なるほど、こんな考え方があるのかと、うなずける意見がほしい！　そんなあなたのために「ミレニアム育児そーだんしつ」が開設されました。一つの悩みにいろいろな立場の人に答えてもらっています。問題を解くヒントになれば幸いです。明日への明るい育児生活に役立ててください。さて今回の相談は…。

天気のよい日には近くの公園へ遊びに出かけます。いつも数組のお母さんと子供が遊んでいて、その中の一人（2歳児：男）が私の子（2歳児：女）に何かと手を上げてきます。大抵はおもちゃなどが自分のものにならない時などに、叩いてきます。叩いてくる子のお母さんは最初に「ダメ」と言ったきり、その後はおしゃべりに夢中で見て見ぬふり状態です。私もお母さん同士のお付き合いがあるので、叩いてくる子には、その子のお母さん以上に強く叱ることができません、どうしたらよいのでしょうか。

幼稚園の園長先生から15歳の高校生まで多くの方々から、さまざまなご意見をいただきました。そうした意見を、私たちが素直にうなずける意見（その1）、体罰も可と考えるお父さんの意見（その2）、そして今の社会事情を背景にお答え下さった意見（その3）の三つに分類してみました。あなたはどうお考えでしょうか。あなた自身のうなずき度はいかがですか。☆に色をぬってチェックしてみましょう。

その一、優てず見守ろう!!　うなずき度☆☆☆☆☆（あなた自身でチェックしてみてください）

■2歳児といえば自己主張が強く自己中心でなければ満足しない時期。かといって子供の要求をそのまま聞き入れるとわがままな子になる可能性あり。自分も親の話に参加しながら子供の遊びを見守り、何かが起きた時は「叩くのは痛いからダメよ」と他のお母さんにも聞こえる声で言ってみては…。

- まず、我が子の気持ち（自分もおもちゃを使いたい）を分かってあげる。その上で友達に譲ることの大切さも教えてあげられたら…。（納屋幼稚園園長）・このような衝突や行動を繰り返してそれぞれが自立心のある人間へと成長していきます。（フジ保育園園長）・叩いたほうも、叩かれたほうも最後は温かい大人の心で包んであげることが大切ではないでしょうか。（少年センター所長）

その二、叱ることも必要!!　うなずき度☆☆☆☆☆

■叩く子の親にも聞こえる声で叩いた子に遊びのルールを何度でも説き聞かせます。自分の子供には、自分の権利は泣きながらであっても主張するように教えます。（ある程度のケンカも可）。また、叩く子には叩かれるものの痛みを知るために父親に強くしかってもらう（尻を打つなど）ことも必要。

- 他人の子供であっても、叱り合うことのできる環境を私たちが普段の付き合いの中で作り上げることが重要（おやじ倶楽部代表）・大人たちが子供たちの特性をじっくりと見守ってあげたい。（1児の父）・感情の激しさが目立っていた我が子のため、夫にはあえて怖い父親になってもらった。（大学生の母）

その三、少しずつでいいんだよ。　うなずき度☆☆☆☆☆

■注意する事が難しいのなら「男の子と、お母さんに近づかないようにする」のが良策と思われます。出会うすべての人と良好な人間関係を築こうとすれば、自分が我慢を続けることになる。そうなると最悪のケースとして、あの「春奈ちゃん殺害」のような悲劇が起こる事も考えられます。気の合う人から、少しずつ、ゆっくりと関係を広げていけば良い。避けることも立派な尽き合い方のひとつと思います。

- 今は一人遊びでもよいから好きなことを思いっきりさせてあげて、遊びの経験を積み重ねて自分に自信が持てるようになってくれば、友だちづきあいも円滑になってくるのではないかと思います。（ミニコミ紙記者）
- 公園遊びだけが子供のすべてではない。（3児の父）

お願い　「ミレニアム育児そーだんしつ」では、こんな悩みをこんな人に相談してみたいなど、ご希望、ご意見をお待ちしております。子どもセンター事務局までどしどしお便り下さい。

ただいま活動中

夢を持っていきいき輝いている子どもたち。
子どもたちをサポートするおとなたち。
そんな人たちの活動を紹介しながら、子どもとおとなを取り巻く様々な事情をレポートします。

高花平地区子ども会「子ども会議」

会議っていうより遊びみたい…だけどそれが大切なんですよね。

子ども会議は、「子ども役員会議」の略称。高花平地区の各町子ども会の子ども役員で構成されています。子ども会行事はこの会議で決められ、育成者役員会議でその決定をフォローします。大人主導型の子ども会の見直しが論議されるなか、高花平では、以前から子どもたちが積極的に、行事の決定や運営に参加しています。

高花平地区子ども会では、月に1度「子ども会議」が開かれ、行事の決定や運営に子どもたちが積極的に参加しています。

5月に開かれた会議では、夏休みのバス旅行について話し合いました。午後7時、地区の集会所に子どもたちがそろうと、育成者の会長前田豪貴さんの「さあもう始めよか」の声で会議は始まりました。

子どもの会長稲垣翔太君が議事をすすめる中、子どもたちはそれぞれ友達とおしゃべりをしながらも、旅行の持ち物について積極的に意見をだしていました。「おやつ！」「弁当どうしよう？」「雨具は？」…しかし、ひととおり意見が出ると、子どもたちは静かになってしまいました。どうなるのかと心配しながら見ていますと、「もっと前に決めやなあかんことあるんとちゃうの？　学校の社会見学の時は何を決めたん？」と絶妙なタイミングで前田さんの助け船が入ります。すると、会議はまた息をふきかえし、「班を決める」「バスの大きさを決める」「何人予約するかわからんで、まだバス決めるなんてできやんで」「募集をせんとあかん」「だれがプリント作る？」と次々に意見が飛び出してきました。このように子どもたちは活発に発言して、45分という時間はあっという間に過ぎていきました。

会議の後、子どもたちに感想を聞いてみますと、「けっこう楽しい」「会議っていうより遊びみたい」とおおむね良好でした。はじめにこの「子ども会議」の話を聞いたときは、子ども同士のつながりが薄いこの時代に、そんなことがうまくできるのかしらという思いがありました。しかし、実際に子どもたちが楽しく活発に会議に参加しているのを見ると、嬉しく、またうらやましくも思いました。

会議を横でサポートしていた前田さんは、うまくサポートするコツについて、「子どもって、会議中でも友達としゃべっとるんやけど、人の話もちゃんと聞いてるんです。聞いてまた次々しゃべって…ただのおしゃべりのようだけど、実は友達と議題について話し合っとるんです。僕らはそこから子どもの意見を拾い上げていくのが役目やと思ってるんです。」と6年間の役員経験から語って下さいました。子どもたちに自由におしゃべりをさせて、必要なときだけ、ヒントになる言葉を投げかけ、子どもの意見を拾い出す。このような大人の舵取りがあって、はじめて子どもたちが楽しくて元気のある会議ができるのだと納得しました。

最後に、育成者役員顧問の小林隆宏さんから伺った「案外子どもたちも、学校以外で、仲間でわいわいがやがやというのが好きみたいです。」という言葉が印象的でした。